



世界的に見る環境問題

— W C S をめぐって ③ —

藤原英司

井の中の蛙

人間一般の特性としてよく話題になるものの中に、「井の中のカワズ（蛙）」という言葉がある。これはいうまでもなく、自分をとりまく狭い世界がこの世の中のすべてだと思ひこみ、その狭い世界で通用している価値観や判断の基準を絶対的なものと思ひこむことをさす。あるいはそれが絶対的なものとは思ひこまないにしても、外界を眺める時に、狭い井戸の筒を通して空しか見ることができないため、外界の認識に著しいゆがみを生ずる事態も、やはり、「井の中のカワズ」的判断ということになる。そしてこの傾向は、人間の一般特性として、かなり広くかつひんぱんに人々の間に認められるものだ。しかもそれは一生を田舎住まいで通した老人たちのような特殊ケースの人々に見られるというのではなく、わが国の大都会に暮らす平均的教養人の間に非常に多く見られる現象なのだ。その人たちの多くは大学教育を受け、知的レベルや物事の認識と判断力において世の中をリードしうる力量をもち、又事実、日本の社会をリードしている人々なのだ。その中に、カエルの大將の域を出ない人々が多々見うけられる。とくに世界的な環境問題については、自信にあふれたカエルが多い。年功を積んだハゲ頭のカエルや、腹の突きでた重役タイプのカエル、勲章や博士号などいろいろな井戸の世界の飾り物をびらびらと身にまとったカエルなど。そして日本の井戸、タイの井戸、アメリカの井戸、アフリカの井戸など、この世には数えきれないほどたくさん井戸の世界があつて、そ

れぞれの井戸のカエルが、それぞれにかつてな偏見をふりまわしてわめくので、世界的な環境問題というのは、つねに耳ざわりな不協和音に満ちている。その不協和音の大合唱の中から生まれてきたのが W C S（世界自然資源保全戦略）なのだが、この W C S に入る前に、もう少し、井戸の世界の事情にふれておく必要がある。なぜならば、W C S を理解するためには、この世が W C S を懐胎した事情をできるだけ知っておくほうがいいし、世界各地の井戸のカエルたちが、どんな合唱をやったかを知っておくことが将来の参考になるからだ。世の中の人々や世界の学者をカエルときめつけてはみたものの、じつはそう言う私自身が大変な「井の中のカワズ」であつて未だにその本性は抜けていない。したがつて本稿にとり組むたびに憂うつになるのだが、自分の井戸から時々出てみた外界のようすを語ることは、これから生まれてくる井の中のオタマジャクシや、井戸の中で生きていくだけで十分と考えているカエルたちの好奇心を刺激することになるだろう。そしてその好奇心が、世界をよりよくするために役立つくれそうなきがする。だから今回は、偏見と独断に満ちた私というオメダタイ・カエルがたどったささやかな私的体験をもう少しつづつてみたい。

井戸と井戸を結ぶ試み

前回、世界野生生物基金（W W F）と国際自然保護連合（I U C N）の生いたちについて簡単な解説を述べた。同時に、私がどのような経過で、これらの二つの国際的な機

関の存在と活動を知るようになったかといいききつも述べた。私は自然や動物についての海外の著作を日本で紹介する仕事を通して、個人的体験として海外での自然保護活動を知りはじめ、少しずつその重要性に目ざめたのだが、それを自分の日常生活や仕事の中に生かすことは不可能に近かった。一九六〇年代初頭のわが国は水俣病などの有機水銀禍が騒がれだし、東京でスモッグが多発しはじめて、公害問題がようやく社会の表面に立ち現われてきた時期だったが、史上に名高い一九七〇年末の公害国会の開催まではまだ十年ちかくあり、人間生活と直接関係のない自然や動植物の保護に関心を向ける人はごく一部の人間にすぎなかった。しかし、たとえ一部の人間にせよ自然保護に目ざめた人々が当時でもいたことは喜ぶべきことだった。私はさつそく二、三の人々に働きかけ、世界野生生物基金の活動に参加する道をさぐりはじめた。いわばその時期に、私は日本という井戸の外の世界で大きな変化がおこっていることをかぎつけ、自分の住む井戸と外の世界をつなぐための同志を求めていたといえそうだが、そのための試みは、さんたんたる敗北に終わった。私が望みをかけていた自然保護に関心のありそうな人たちは、ことごとく私の考えを絵に描いたモチにすぎぬと一笑に付した。なかには井戸の外の世界で何がおこっているかを知っている人もいたが、そういう人は自分が得た外界の知識をもとに、外の世界のできごとと自分たちがすむ身の井戸の中の世界にはなじまないのだと、懇切にいぬいにお説教される始末だった。

同じようなお説教を何人かの先輩から聞かされるうちに、私は絶望的な気分になっていった。自然や動物の保護について理解と関心がありそうな人々にしてその有様なら、他の一般の人々のこの分野への理解と認識のていどはおして知るべしであり、要するに私が住んでいる井戸の中では、自然保護に関する認識の高まりなどは、当分の間、期待するのはむりと考えたほうがよさそうだった。この時、私の慰めとなったのは、前回にふれたIOPN(自然保護国際事務所)の構想から事務所の設立まで十八年を要したということであつた。新しい価値観が新しい行動と結びつくにはそれなりの時間と年月が必要だということであり、わが国で自然保護が民衆の間に浸透するには、おそらく何十年もの歳月が必要なのだろうという気がした。いや、もっと正確に当時の私の印象を述べるなら、私が生きている間には、日本に自然保護が市民権を獲得できるような時代はこないだろうという気がしていた。だが、この予想ははずれ、十年たらずでわが国は

自然保護ブームとも呼ぶべき一九七〇年代を迎えるのだが、そんなに早く予想が裏切られるとは思っていなかったことを考えると、当時の私の現状認識は、結局のところ井の中のカワズ的認識にすぎなかったといえる。一九五九年の夏、水俣の漁民が新日本窒素の水俣工場に乱入する事件がおこって、これがわが国で公害から自然保護へと社会的雪崩現象の先駆となった重大事件であつたにもかかわらず、動物文学の世界に入りびたっていた私には、その重要な先駆現象の先を読むことができなかったのだ。

実験的試み

動物文学の世界で自然保護にかかわる活動をしてみようという考えが、当時の私に残されたただ一つのやり方のように思われた。海外ではそのような作品が多く出版されはじめていたが、それをわが国で出版することは、きわめてむずかしかった。自然保護という考え方が社会一般の通念として珍しいものであつたため、自然保護的な海外の著作を翻訳紹介するという出版企画は、当時のわが国の出版界では採用されにくい企画だったのだ。又、たとえその企画がパスしたとしても、それは出版社も訳者ともに採算のとれないものであることを覚悟しなければならなかった。そこで私は仕事を二つに分けることにし、自然保護的な作品は、採算を度外視してすすめることにした。同時に同じ考えて仕事に当たってくれる出版社を捜すことに努力しはじめた。

この時代に私を支えてくれた出版社としては、集英社と芸文社があつた。そして、これらの出版社によって、渡り鳥の絶滅を扱った地味な作品『帰らざる渡り鳥』(F・ボズワース)や、アメリカシロツルを守る自然保護闘争の歴史を綴った『滅びゆく野生のいのち』(F・マックナルティ)(この作品はのちに『復活』と題をかえて、どうぶつ社より再刊され、ボズワースの作品は講談社の『世界動物文学全集』に収録された。)などが刊行された。だが、これらの先駆的作品の紹介は、単独にその作品の刊行が実行できたわけではない。これらの作品の前後に、売れそうな作品を何点か手がけ、その余勢をかって実験作品の企画を編集会議でパスさせてもらうという方法がとられた。しかし、こうした実験的な試みが実現できたのは一九六〇年代末であり、そのころ、欧米の自然保護界は新たな激動期を迎えつつあつた。それが前回少しふれたヨーロッパやイギリスにおける重工業廃棄物による環境汚染である。ヨーロッパでは小さな国が集まっているため、

一国の環境汚染は、そのまま近隣の国々をまきこむ国際問題としての性格を帯びることを前回に書いた。ヨーロッパでの国際問題には、ライン河の汚染や地中海の汚染などいろいろなものがあつたが、その中にスウェーデンを襲う酸性雨とバルト海汚染の問題があつた。酸性雨はヨーロッパ大陸での大気汚染が国境をこえてやってくるものだったし、バルト海の汚染も、ポーランド、ソ連、フィンランドなど、周辺の複数の国家でのかつて気ままな排水や海洋投棄が原因だった。

WCSが生まれてくる背景には一九七二年の国連人間環境会議があるが、この会議の火つけ役となつたのが、じつはスウェーデンだった。しかし、どうしてスウェーデンが？という思いにとらわれる人が多いにちがいない。スウェーデンはアメリカやイギリス、ドイツ、フランスなどちががつて、私たちの日常の国際政治の話題に登場することが少ない。しかし、公害や環境問題というと、スウェーデンが主役格で登場することがけっこう多い。これはいったいどういうわけなのだろうか。WCSの懐胎にも一役かつたスウェーデンの立場とくにスウェーデンと酸性雨の問題をここで簡単に見ておくことにした方がいいだろう。

ヨーロッパの酸性雨

スウェーデンでは一九五〇年代後半から酸性雨が問題になりだした。酸性雨が発生する機構についてはいろいろ研究がすすみ、今日では世界的な環境問題の主要課題になっているが、要するに工場から排出される大量の亜硫酸ガスが上空で濃い湿気と混じりあつて硫酸に変化し、雨とともに地上へ降ってくるものだ。恋に狂つた若者が、恋人にふられた腹いせに、相手の顔に硫酸をかけたという事件が今でも時々あるが、硫酸をまともにかぶれば、人間の体の皮膚は焼けただれる。酸性雨も硫酸と同じ濃度のものが降れば、人間も動物も生きてはいられない。だが、きわめて薄いものなら当面どうということはない。環境問題のやっかいなところは、じつにゆっくり、じよじよにじわじわと危機が迫ってくるというところにある。酸性雨も同じで、スウェーデンでは一九五〇年代後半から六〇年代後半にかけて、およそ十年かかって酸性雨の影響が少しずつ増大していった。

工場廃煙の問題はヨーロッパ各地の重工業地帯で問題化し、これを防ぐために各国の

工業地帯では工場の煙突を一〇〇メートルから二〇〇メートル級の高いものに変えていった。煙突を高く高く、より高くして排煙をはるかな上空に放出してやれば環境汚染は防止できる——と、人々は考えたのだ。ところがこれは浅はかな考えだった。上空には上空でちやんと大気の流れがあり、ヨーロッパではそれが南から北へ流れていた。しかも、ベルギーや西ドイツ、オランダなどで上空へ吐きとばした排煙は、時にスウェーデンへ集的に運ばれていった。排煙はさらに北の北極地方へ向かうこともあり、極地では亜硫酸ガスに弱いコケの類が枯れた現象もみられた。

こうしてスウェーデンの国際気象研究所や水・大気汚染研究所は、自国と北欧諸国に降る雨や雪が南部ヨーロッパの重工業活動のために汚染され、スウェーデン自体が西ドイツやイギリスなどと同じ重工業汚染に見舞われていると警告した。この警告には、ちやんとしたデータの裏付けがあつた。超微粒子を集められるフィルターで硫酸塩化合物や浮遊粉塵を集めて分析することを国内の各地で十年ほど続けたところ、自国の生産活動が原因で出る汚染物質より、はるかな南方から運ばれてくる汚染物質のほうが、ずっと高率であることがわかつたのだ。

似たような問題は農業や水をめぐる分野にもみられた。たとえば人々がたべる鶏卵にふくまれる水銀の量を測定したところ、スウェーデン産のタマゴはデンマークやオランダで生産されるタマゴよりもずっと多量の水銀を含んでいることがわかつた。これはどうやら農業用の種子の消毒に使う水銀系農薬に原因がありそうだった。又、スウェーデン国内の淡水漁場で採取した魚体を分析してみたところ、これも非常に高い濃度の水銀が検出された。このほうは、たぶん、バルブ工業関係の排水が原因とみられた。そこでスウェーデン政府は種子の消毒に水銀系農薬を用いることを禁止し、バルブ工場からは未処理の排水を湖や川に流してはいけないという措置をとつた。ところがそのあとでも汚染は止まらなかつた。生物学者たちはその原因をヨーロッパの近隣国際間の遠距離汚染に求めた。環境汚染はもはや一国だけの問題ではなく、風と水の二つの自然媒体によって、世界の各地へ拡散しはじめることがわかりだしたのだ。極地のラップランドでトナカイの体内から蓄積された水銀が検出されるようになったことも、この問題に関心をもつ人たちの危機感を深めた。

アストロームの提案

こうした問題は、どうしても各国の代表者が一堂に集まって相談しなければ解決のめどがたない問題だった。そこでスウェーデンはこの問題を国連の舞台へもちこむことにした。一九六八年五月に国連で経済社会理事會が開かれたが、その席上、当時、国連のスウェーデン大使をつとめていたアストローム氏が提案演説を一席ぶった。そしてこの演説こそこの世がWCSを懐胎する重要な下地を準備するものとなった。アストローム氏は、その演説の中で、各国の無計画な開発や産業活動が地球上の各地で人間の生活をおびやかしはじめていることを指摘し、どうしても一度、国際會議を開催して、開発や環境破壊について、多角的に討論する必要があると提案した。

国際問題としての近隣被害は、ていどの差はあっても、当時、たいていの国で何らかの問題をかかえていた。アメリカでは一九四八年に有名なドノラ・スモッグ事件がおこっていた。これはピッツバーグ近郊のドノラ溪谷でおこったスモッグ事件で、この時のスモッグが原因とみられる二〇人の死者がでた。製鉄所と亜鉛精練所の排煙が、折からの濃霧と結びついて多数の犠牲者をだしたのだが、似たような状況はアメリカの各地でみられ、アメリカ国内の各州間に他の州が原因とみられる汚染をかぶる例が頻発していた。

西ドイツで大気汚染の防止に関する法律制定の動きがおこったのは一九五四年である。だが、この時、議会で提出された法律案は不採択になった。大気汚染についての科学的データがないというのがその理由だった。だが、一九六〇年代にかけて西ドイツの工業地帯では工業活動にともなう大気汚染が着実に進行し、とくにバイエルン地方のように無風状態の日が多く、又気温の逆転現象が頻発する地方では地上に有毒ガスが滞留することが多く、数々の問題がおこった。この結果、バイエルン地方では煙突の高さを一二〇メートルから一五〇メートルにし、火力発電所では二二〇メートルもの高さにする必要があった。しかし、それがスウェーデンに近隣被害をもたらす原因となったことは、すでに述べたとおりである。

イギリスの排煙は時に海をこえてノルウェーを直撃する事態がおこっていたし、スイスの氷河を源流としてドイツからオランダへと貫流するライン河でも水質汚染は重要な

課題として残されていた。ソ連でも黒海沿岸はいうにおよばず、コーカサスの高地にある保養地キスロポドスクでさえ各種の汚染で被害を受けはじめていた。キスロポドスクの最大の問題は、近くのポドモフに建設された八基の石炭燃焼炉からの排煙だった。

スウェーデン大使アストローム氏の「環境會議を国連の舞台で」という提案は、当時の各国代表の支持を受け、「よからう、やろうではないか」という合意が理事會で得られた。そして同年末の国連総会で、正式にこのことが決定された。會議の開催地は、スウェーデンのストックホルム市がえらばれ、會議名は「人間環境に関する国連（国際）會議」ときまった。これが通称、国連人間環境會議、あるいはストックホルム會議と呼ばれているものだ。

コケむす大地

日本という井戸の世界は、世界の環境問題の視野からみると、きわめて特異な立場にある。それは自国の環境汚染が直ちに国際紛争に発展する立地条件を備えていないことだ。周囲が海によって他国と隔てられている上に海の幅が広いので、海洋の汚染が直ちに隣国へ波及することはないし、気流もだいたい中国方面から東へ流れることが多く、東は広大な太平洋なのでたとえ富士市の製紙排煙がアメリカに影響をおよぼすという心配はない。さらに温暖湿潤な気候のため、陸地では、植物を切っても刈っても、又、土地を丸裸にしてもすぐに草や木やヤブが生い茂る。雨はじやんじやん降るし、川は年に何回となく洪水状態になり、汚物も何もかもどつと洗い流し、時にはついでに家や人間まで押し流す。世界の陸地の砂漠化は今日スローガン化された重要な環境問題だが、これを実感として肌身に感ずるには、アフリカやアメリカ西部、オーストラリアなどの砂漠や半砂漠地帯を実際に歩いてみる以外、日本井戸のカエルには実感できないことではなからうか。私は今でも海外の荒地を歩いて日本へ帰ると、飛行機から見おろす日本の陸地に異様な思いを抱く。農地も山も、まるで一面にコケむしたような緑におおわれている陸地が、都市の背後にひろがっているのを上空から見ると、この井戸で暮らすかぎり、砂漠化問題など、どこか遠い世界のできごとだと思ふのもむりはないと考える。同様に、環境問題はすべて国際問題としてとらえる必要があるという考え自体も、理念としては理解できても、ついに切実な体験としては納得できないだろうと思わざるを得

ない。環境問題を考える専門家は、むしろそんなことはないが、私が言うのは日本の一般民衆のことである。そして民衆一般の認識はそのまま政府の認識といえる。なぜならば政府を構成する議員や閣僚は一般民衆によってえらばれるからだ。そのえらばれた議員のなかに環境問題を世界的な視野から認識する人がいて、それを政策にとり入れて実行すると、その人は遠からず失脚する。その人の先見性は一般民衆と通常の議員には理解をこえたものであり、その先見性のゆえに民衆も議員仲間もその人を葬りたがるからだ。私たちはこのささやかな例を、環境庁の元長官、大石武一氏に見ることができらる。

環境問題を世界的なレベルで政策に反映させるためにもつとも必要なことは、その分野での専門家を多数養成するよりも、一般民衆にその視野をもってもらうことである。これは忍耐と時間を要することだが、いったんそれがなすとげられると、あとはずっと楽だ。目ざめた一般民衆は、はずみのついた転石のように、ほうっておいても環境保全のために活動しはじめ。このことを強く感じたのは、世界野生生物基金の本部をスイスに訪ね、又、アメリカのさまざまな自然保護団体の事務所や国立、州立、私立の保護区などを訪ねた時だった。それらのさまざまな井戸での体験は日本という井戸の特異性をはつきりと認識するのに役立つが、同時に外の世界の井戸がけっして一様でないという思いも強く抱いた。ヨーロッパの旅はスペインから北上して欧州全土をほぼまわり、さいごには北海にまで船で出たが、そこにはそれぞれに特異性を備えたさまざまな井戸がめまぐるしく存在し、しかもそれは、ソ連や東南アジア、アメリカ、カナダなどとは異った井戸で、アフリカやオーストラリアなどとは又ひどく違った井戸だった。いろいろ異なる井戸と住民とその自然、そして異なる考え方には少なからず興奮したが、それを日本の井戸の中でどう生かせばいいのかについてはとほうにくれた。そしてひところ、バカの一つ覚えのように、会う人ごとに「とにかく一度、日本から出てみるのがいい」という言葉をくりかえした。自分の目で外の世界を見ることが何よりてっとり早く考えたからだ。

WWF日本の成立

当時の私のこのせりふは、人々に不快感を与えたようだ。なぜならば、外の世界へで

てみたくても、金と時間がなければ、自分の井戸の外へは一步も出られないのがふつうで、当時の一般の人々は、この二つの条件がかなえられにくい立場にあった。私自身も立場は同じだったが、文筆業は時間のつごうがつけやすかったし、一、二カ月の生活はなんとかなるめどがたつと、あとの金を旅費に使うことができた。夫婦だけの気楽さとお金はある時に使ってしまった、というギリギリの考えが強かったために、ただひたすら外の世界の井戸をのぞいてまわった。

世界野生生物基金(WWF)の活動に参加する問題も、私は他人に頼ることをあきらめ、自分一人で直接スイスの本部と連絡をとって活動しはじめた。上野動物園の古賀忠道園長がWWFの活動に細々とした動きながら参加していることを知ったのはそのころである。私はさっそく古賀路線に合流し、WWFの日本委員会ができた。一九六八年の秋のことで、私が日本の外での動きを知ってから早くも十年近い歳月が流れ去っていた。WWFの本部がスイスに創設されたのは一九六一年であるから、その後七年たつて日本委員会が結成されたわけだが、この一九六八年という年は、先に述べた通り、スウェーデン大使が国連で画期的な提案演説をおこなった年である。秋に日本委員会が結成されると、急に身辺が忙しくなった。やたらに会議がふえだしたのだ。会の運営というものがいかに大変なものか、又それがどれほど金のあるものか、又それは会そのものの運営に頭を使う以上に、人と人とのつきあいにどれほど多くの時間と労力をさかなくてはならないものかということも思い知らされた。例えば人々にWWFのことを知らせるためにチラシを作って、それを自分の自然保護関係の著訳書にはさみこむことにしたが、そのチラシの原稿、イラスト、印刷費、本にはさみこんでもらうための出版社との交渉など、すべてを資金ゼロの中から自分でやらなくてはならなかった。事務局を預った古賀氏はさらに大変だった。集まった委員はそれぞれにやってなことを発言し、その発言は熱意のあまり性急な要望となつて事務局の負担を増し、古賀氏はそれを丸くおさめてすべてを軌道にのせなければならなかったからだ。

当時、私が体験した以上のようなささやかな草創期の混乱と苦勞は、じつは異なる井戸と井戸を結びつけようとする時におこる一般的な現象で、当時、国連の舞台でも、同じようなことがおこっていたのだった。

国連は、先述のとおり一九六八年十二月の総会で国連人間環境会議を開催することを決定したが、決めたあとが大変だった。会議を開くと決めること自体は簡単なことだ。

しかし、実際に会議を開くことは至難の業である。とくに実りのある会議を開くためには、大変な準備が必要になる。誰がいつ、どこで、どういう目的で会議を開くのかを具体的に決め、司会、進行、決議、事後処理までを含めた綿密な計画をたて、開催日までにすべての段取りをおえなければならぬ。このため、大きな会議については、そのつど、その特定の会議のための事務局が創設され、開催日に向けての準備がスタートする。国連では人間環境会議を四年先の一九七二年に開くことにきめた。これは大きな会議になりそうだが、準備に四年もみればよかろうというのが当時の関係者が抱いた平均的な考えからだった。ところが、この見通しは少々甘かったようだ。それは従来の国連会議という井戸の中の体験から得た視野の狭い見当だったといえる。このことにまず最

初に気づいたのは、当時の国連事務総長だったウ・タント氏だったにちがいない。彼は来るべき新しい会議の計画を検討していくうちに大変なことに気づいた。つまり人間環境という言葉のもつ多様性と、その新しい会議で議題とされるべき分野のあまりに複雑多岐にわたる様相に圧倒されそうになったからだ。そこで彼はまず手はじめに世界の環境の現状がどうなっているかについて当時の現況をまとめにかかった。やってみるとこれはなかなか大変な作業だった。世界とひと口にいても、独立国だけの数だけでも大変なものであるのに、それらの国々の一つ一つが、自国内に多様な環境をかかえているからだった。しかも国によっては環境の現状がどうなっているのか、よくわからないところも少なくなかった。ウ・タント氏はおそらくその時、自分自身の計画が世界をまるごと値ぶみしてみる宇宙的な競争師の賭けに似ていると考えたのではなかろうか。(作家)

(つづく)